

森博嗣

起源は忘却され
伝統の手法だけが
取り残される。

たとえ、
神のトリックであつても



笑わな い

数学者

Hiroshi Mori

WAIT THE MATHEMATICAL GOODBYE

N. D. C. 913 344p 18cm

わら
笑わない^{すうがくしや}数学者

一九九六年九月五日 第一刷発行 一九九七年七月三〇日 第五刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに
表示してあります

著者—^{もり}森^{ひろし}博嗣 © HIROSHI MORI 1996 Printed in Japan

発行者—野間佐和子

発行所—株式会社講談社



東京都文京区音羽二一二二一 郵便番号 一一一〇一 編集部〇三・五三九五・三三〇六

販売部〇三・五三九五・三六二六

製作部〇三・五三九五・三六一五

印刷所—廣済堂印刷株式会社 製本所—和田製本工業株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部あてにお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

森博嗣

起源は忘却され
伝統の手法だけが
取り残される。

たとえ、
神のトリックであっても



笑わな
い

数学者

Hiroshi Mori

WAT THE MATICAL GOODBYE

ISBN4-06-181927-5

C0293 ¥854E (0)



1920293008547

定価：本体854円

※消費税が別に加算されます。

笑わない数学者

森 博嗣

森博嗣は、姿よく魅惑的な刃文を持つ名刀である。その切っ先がどこに向いているかを見誤ってはならない。

ここで剣は、本格推理そのものを切っている。何と、オリオン像消失の謎はこの物語の中心に置かれながら、そこにはない。目的ではなく、手段に過ぎない。自明と思える答に神のごとき名探偵が気づかぬことが、実は物語の要のひとつなのだ（以下数行は、この下、帯に隠れた部分に逆さに印刷してもらいます。本書を読み終えてから見て下さい）。そのこと自体が謎であり、物語の要素である妙。

そして、真の読み所は、トリックの解明も終え、日常的な十進法を越えた十一番目の章にある。作者の刃先はここに魔術的なリフレインを刻む。本格の文法とは違った言葉が語られる。

逆説でも何でもなく、その剣の動きこそが、現代本格推理の豊饒を示すものとなっている。

北村 薫

笑わない数学者

林博嗣

YODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス

ブックデザイン 熊谷博人
カバーデザイン 辰巳四郎
図版 森博嗣

目次

- 第 1 章 三ツ星館の謎———10
(はたして、これらは妥当な観察点からのもの)
(で、しかも連続した存在なののでしょうか?)
- 第 2 章 宇宙と数学の謎———51
(起源は忘却され伝統の手法だけが取り残さ)
(れる。たとえ、神のトリックであっても)
- 第 3 章 勇者と死者の謎———83
(利用価値のある肉体的実在、再生あるいは)
(統合されつつある美および不明確な心象へ)
- 第 4 章 内側と外側の謎———115
(残念ながら、観察者と独立に存在するもの)
(は、定義できないゆえに、存在しない)
- 第 5 章 天才数学者の謎———146
(ならば問う。非厳密あるいは矛盾が常に何)
(らの働きもしなかった歴史がありえたか)
- 第 6 章 襲撃者と屍の謎———180
(ろくに泳げもしないくせして、人間っ)
(てやつは……、とセイウチは笑った)
- 第 7 章 遠ざかる過去の謎———206
(微分方程式という融通の利く語彙は、一度に)
(一所しか見えない人間の目が産んだものだ)
- 第 8 章 天才建築家の謎———240
(造形指向の回帰に根ざす運動は一般に源泉)
(が希薄だが、目新しさだけでは成立しない)
- 第 9 章 忘却と覚醒の謎———264
(まさか、感情的忘却と知的覚醒が単純に同義)
(で同時に起こるものとおっしゃるのですか?)
- 第 10 章 再現される消失の謎———298
(現実がいつもシンデレラの醜い姉のようで)
(あれば、公理の靴はいかにも窮屈となろう)
- 第 11 章 有限と無限の謎———329
(十万桁まで計算されたパイに人間性がないと)
(いうのですか? 人間以外に誰がします?)

MATHEMATICAL GOODBYE

by

Hiroshi Mori

1996

登場人物

てんのう じしやうざう
天王寺翔蔵

天才数学者

てんのう じそうたろう
天王寺宗太郎

翔蔵の長男、流行作家

てんのう じりつこ
天王寺律子

宗太郎の妻、女優

てんのう じしんいち
天王寺俊一

宗太郎の長男、俳優

かたやま きせい
片山基生

建築家

かたやまりようこ
片山亮子

翔蔵の長女、基生の妻、彫刻家

かたやま しほ
片山志保

亮子の長女、デザイナー

かたやまかずき
片山和樹

亮子の長男、N大学2年生

ゆかわしげはる
湯川重治

亮子の愛人、建築家

すずき 彰
鈴木 彰

天王寺家の使用人

すずき きみえ
鈴木君枝

彰の妻、家政婦

すずき のり
鈴木 昇

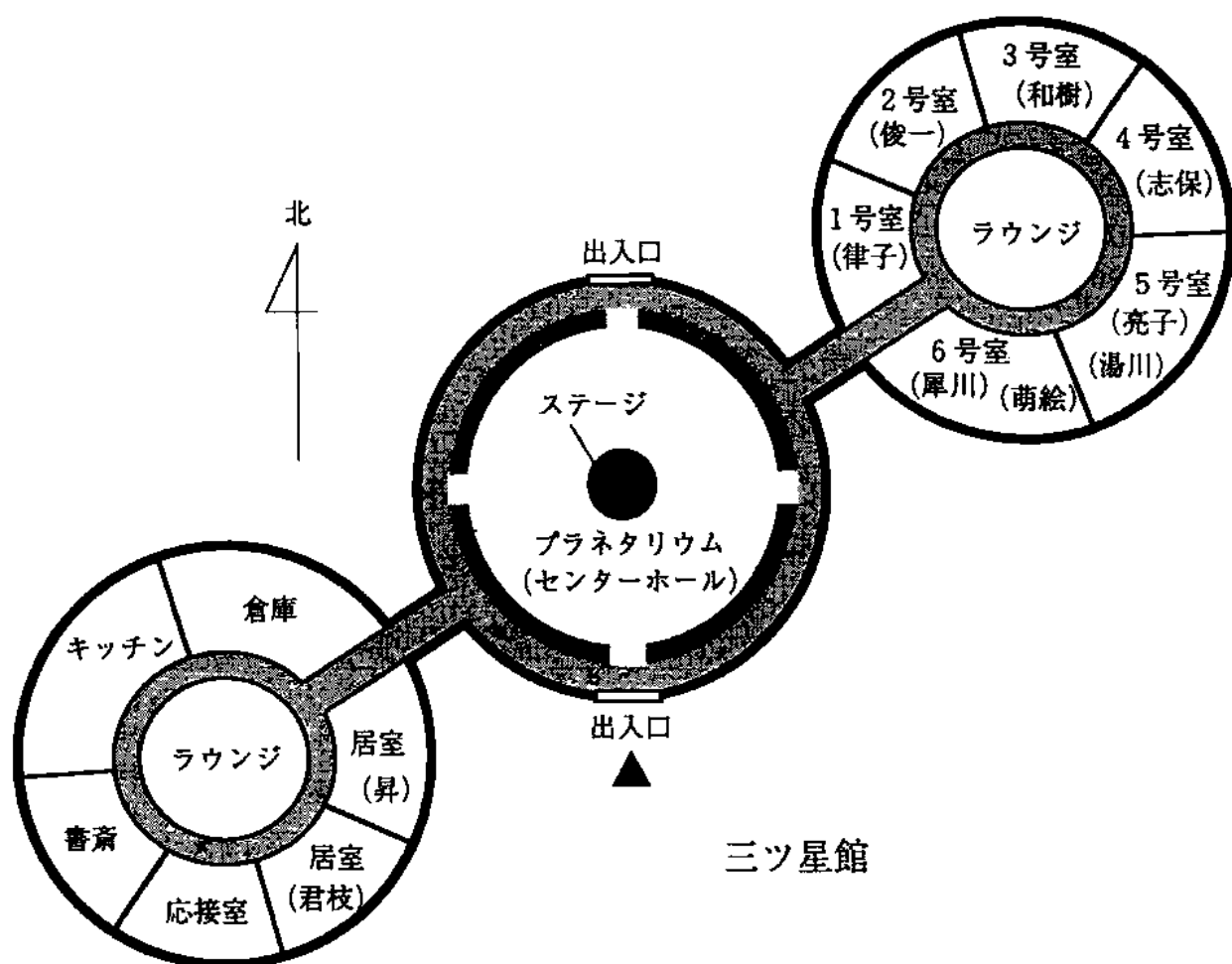
君枝の長男

にし のそのもえ
西之國萌絵

N大学2年生

さいかわ そうへい
犀川創平

N大学建築学科助教授



私は人々が宗教的信仰を欲するような具合に確実性を欲した。確実性は他のどこよりも数学の中に見いだされそうであった。しかし、私の教師たちが私に受け入れさせようとした多くの数学的証明は誤謬に満ちていること、そしてもし数学の中に実際に確実性が見いだされうるならば、それはこれまで確実であると思われてきたものよりも堅固な基礎を持つ数学の新しい分野においてであろうということを発見した。しかし仕事が進むにつれて私は象と亀の寓話を絶えず思い出す羽目となった。数学的世界を乗せる象を作りあげると、私はその象がよろめくのを見だし、その象が倒れないように保つ亀を作ることに取りかかった。しかしその亀も象と同じく安定ではなかった。そして20年にもわたる非常な労力のあとで、私は数学的知識を疑う余地のないものにすることで自分にできることはもう何もないという結論に達した。

(Portraits from Memory/Bertrand Russell)

第1章 三ツ星館の謎

へはたして、これらは妥当な観察点からのもので、
しかも連続した存在なのでしょうか？

1

正確な長方形に刈り取られた森に囲まれて、一面のコンクリートは今、雨に濡れている。この時期には珍しい曖昧な夜。ぼやけた記憶のような不透明な空気は、真っ黒な闇に溶け込んだクリームのようだ。

少女は、傘をさす手が冷たかった。

湿ったものは、なんだか気持ちが悪い、と彼女は思う。吊革も階段の手すりも、そして誰のものかわ

からない傘のグリップも。

お祖父様は出てこれなかった。振り向かなくても彼女にはわかつている。お祖父様は、こんな不吉な寒さが大嫌いなのだ。きっと、曇ったドアのガラス越しに、彼女たち皆の後ろ姿を見ているのに違いない。

小雨に霞んだ視界。自分の息も白い。まるで煙草を吸っているみたいに。

「本当だ！ おじいちゃんの言ったとおりだ！」弟が走って行って叫んだ。

その言葉に、少女は息を飲む。いや、本当は、彼女がそう叫びたかった。

少女は足を止め、目を凝らす。

「ないわ！」彼女は振り向いて母親に言った。「どうして……？ 本当にいなくなってる！」

母の表情は、動かない。

冷たい雨。静かな夜。真っ直ぐな塀。平面のコンクリート。

けれど、今夜はクリスマスイヴだ。

お祖父様が用意した、とっておきのプレゼント……？

少女のまわりでは、コンクリートに吸い込まれるように、雨は静かに、ゆっくりと落ちている。

もう一度前を向いて、彼女は真っ直ぐ、それがあ
るはずのところに歩いていった。

ついさきほど降り出した雨。傘を持っているのが
億劫である。

夕方まで、ここで、みんなで遊んでいた。彼女と
弟と、そして従兄いとこの三人でサッカーをしていた。

大きなオリオン像の両足の間が、サッカーのゴール
だったのだ。

そのオリオン像が今はどこにもない。

「ねえ、どこへ行ったの？ おじいちゃんが隠した
の？ ねえ、どこに隠したの？」弟は母親にきいて

いる。

母親は答えない。

少女にもわからない。

あんなに大きな銅像がどこに消えてしまったのだ
ろう？

地面を見ても、濡れて黒くなったコンクリートが
広がっているだけで、買ってもらったばかりのエナ
メルナメルの靴が汚れていないか、彼女はついでに確かめ
る。

横目で伯母を見ると、彼女はいつものお芝居のよ
うに目を見開き、馬鹿みたいに口を開きっぱなしだ
った。

大人も驚いている……。

でも、少女は、考えようとした。これは、手品な
のだ。

(どうやったのかしら……!?)

他にも大人が何人かいたが、誰も口をきけなかつ
た。

お祖父様の庭は一面のコンクリート敷きである。その真ん中に立っていた銅像がなくなっている。

庭には、木も植物も、傾斜も起伏も、何もない。あの大きな銅像が隠せそうなどころなんて、どこにもないのだ。

(あんな大きなものが……)

そう、彼女の何倍もある大きなギリシャの勇者の像。それは、彼女の母が造ったものだ。

そのお母様も驚いている……。

少女は、少し寒くて鼻水が出そうだった。屋敷の方を振り向いて見ると、入口のドアの中にお祖父様の姿が見えた。お祖父様は、手品の首尾に満足しているのだろう。

「まったく！ 何てことかしら……。お父様のしそ
うなことだわ」伯母がひきつった表情で囁いた。
「気に入らないから壊してしまわれたのね」

少女は伯母が嫌いだった。ヒステリーで、いつも酔っぱらっている。

「だって、さっきまであったんだぜ。そんなに簡単に壊せやしないよ」従兄が言った。彼は母親のように酔っぱらっていないから、言うことはちゃんとしている。

「ねえ、お姉ちゃん、あれは戻ってくる？ あれがないと、サッカーができないよ」弟が暖かい手で、彼女の手を握りながら言った。

2

犀川創平さいかわ せうへいは人相の悪いサンタクロースを見ている。
た。

サンタはまだ若い二人組で、ティッシュを配っている。犀川も二つもらって、コートのポケットに入れた。何の広告なのかは確かめていない。サラ金か、大人の出会い、といった類たぐいであろうか。サンタだからといって、まさか、ボランティアということはないだろう。

那古野駅前のナナちゃん人形で、西之園萌絵と待ち合わせの約束であった。

ナナちゃんというのは、身長が五、六メートルはあるマネキン人形である。普段はだいたいヌードなのだが、今はサンタクロースの赤いコートを着て、往来の真ん中に立っている。この付近にいる人々は、ナナちゃんのファンというわけではない。彼女は待ち合わせ場所の目印として那古野では有名な存在だった。

クリスマスというものの、最近の犀川は何も感じない。十二月二十五日だから、1、2、2、5の数を全部足すとちょうど10になる、というくらいの印象しかない。子供の頃にはもう少しましな何かを感じたかもしれないが、それでも、実家の隣がパン屋だったから、売れ残りのケーキをもらったというくらいは些末なことである。トナカイの鼻が赤く光るデイズ二ーの映画を見たような気もする。あれは、電気ウナギのようなものだろうか、とそのときは思

ったものだ。

西之園萌絵が現れた。

「すみません、先生、お待ちになりました？」萌絵は、短い髪を振って、周りをきよろきよろしながら言った。「なんだか、すごい人混みですね……」

「いや、まだ約束の時間より早い」犀川は時計を見ながら言う。「一分とちょっとだけだね」

萌絵は少し頬を赤らめて微笑んだ。どうやら、彼女は走ってきたようだ。

「電車まで、まだ、三十分あるからコーヒーでも飲むか？」犀川は歩き出しながら言う。

「はい」

地下街へ下りたが、そこは洪水のような人混みだった。どの喫茶店も座れそうにない。二、三軒覗いて見たが、どこも入口で待っている客がいる。

「先生、諦めましょう」萌絵が後ろから言った。「コーヒーは電車で飲めます」

犀川は頷いて、進路を変更する。階段を上がり、

デパートの食料品売場を通り抜け、エスカレータに乗った。萌絵は、犀川の後からついてくる。

「西之園君さ……、もぐらのチカちゃんって、知ってる？」犀川はエスカレータで振り向いてきいた。

「いいえ」萌絵は笑いながら首をふった。「もぐらのチカちゃん？ 先生のお友達ですか？」

犀川はにやりと笑う。

「いや、チカちゃんは友達じゃない。赤福餅あかふくもちの赤兵衛さんとは知り合いかもしれないけど……」

「アカベエさん？」萌絵は顔をしかめる。「誰ですか？」

地下にある近鉄の乗り場で、津までの指定席券を買う。特急は全席指定である。黄色と白のセンスの良いすっきりとしたデザインの電車が既にホームで待っていた。

犀川は改札を入ったところの売店で煙草を買う。おつりをもらって、萌絵を探すと、彼女は五メートルほど先で待っていた。

犀川は、このとき初めて、萌絵の服装に気がついた。煉瓦色れんがいろのオーバーコートには、黄色と紺と白のオリエンタルな模様が入っていて、はっきり言って派手である。しかし、彼女の服装はいつも地味ではない。犀川が驚いたのはそんなことではなかった。そのオーバーは短く、グレーのブーツを履いているのが見えた。

「どうかしました？」萌絵は犀川の表情を見て言った。犀川はポーカーフェイスだが、どういうわけか、彼女にだけは通用しないことが多い。

「あ、いや……」そう言って、犀川はもう一度彼女の服装を見る。「僕は、そこで煙草を吸ってくるから、さきに乗ってて良いよ。津まで一時間もあるから、吸い溜めしとかなくちゃ」

「私がスカートだからですね？」萌絵は犀川から少し離れてポーズをとった。

「ああ、そう……。そうね、珍しいね……」犀川は辺りを見渡しながらかまかす。

「本当は嫌いなんだけど……」萌絵は近づいてきて、ぶつかるとように犀川の右腕に触れた。「今日は、しかたがないわ。パーティーなんですから……。でも、服装なんか、どうでも良いことですよね、先生？」

「ああ、そうだね」犀川は歩き出す。

「男の人の服って全部、女も着られるのに、女の服には、男の人が着れないものがありますね」萌絵はそう言ってくすくすと笑い出した。「これは、何故ですか？ 先生」

「良い問題だね」犀川は上の空で言う。「それは、たぶん、諺で言うところ……」

「大は小を兼ねる？」萌絵はすぐ言う。

「いや、帯に短し襷に長し……、じゃないかな」

3

犀川は煙草が吸いたかった。結局、ホームの隅に

ある喫煙室は満員で、出発まえに一服できなかったのだ。車内は、座り心地の良いシートであったが、足もとは少々窮屈だったし、電車が目的地に到着するまで、煙草もしばらく辛抱しなくてはならない。

犀川は、数年まえ、三重県津市にある国立M大学の建築学科で、非常勤講師を担当したことがあった。当時は、週に一度はこの電車に乗ったものだ。始発の那古野から津までは一時間弱。そのときは、もちろん禁煙車両などには乗らないから、ゆっくりと煙草を楽しみながら読書ができた。今日は、年末のためか、それとも時間帯が悪かったのか、禁煙車の切符しかなかったのである。

時刻はまだ五時まえであるが、窓の外は既に暗い。

萌絵は、犀川の右隣の窓際のシートに座っていた。彼女は、犀川が勤務している国立N大学工学部建築学科の学生である。犀川は三年ほどまえに助手から助教授に昇格し、自分の研究室を持った。通